

副詞残置動詞句内省略の分析

VP 省略・疑似空所化と比較して*

鈴木 舞彩

1. 導入

(1a)のVP省略や(1b)の疑似空所化は動詞句の省略が関連している。(1c)のVP副詞残置動詞句内省略 (Adverb-Stranding VP Ellipsis: ASVPE)も観察されるが (Engels (2010)),他の省略構文との比較をふまえた議論は少ない。

- (1) a. John talked to Bill but Mary didn't [e]. (Lobeck (1995: 21))
b. John will bring wine to the party, and Mary will [e] beer. (Thoms (2016: 286))
c. John read the newspaper slowly, and Mary did [e] quickly.

(2a, b)のように、疑問文に対する応答文において、VP省略は可能であるが疑似空所化は不可能である。(2c)のASVPEは疑似空所化よりも容認度が高い。従って、この点ではASVPEはVP省略と類似した特性を持つ。

- (2) a. Who read the newspaper? – John did [e].
b. * What (else) did John eat? – He did [e] a salad. (Thoms (2016: 302))
c. ^{ok}/?? How did John read the newspaper? – He did [e] quickly.

(3a, b)のように、定形節境界を越えるVP省略は可能であるが、疑似空所化は不可能である。(3c)のように、定形節境界を越え、remnantが埋め込み節の動詞句を修飾するASVPEは不可能である。従って、節制限性に関しては、ASVPEは疑似空所化と類似している。

- (3) a. Kathy thinks she should study French, but John doesn't ~~think she should study French~~.
b. * Kathy thinks she should study French, but she doesn't ~~think she should study German~~. (Thoms (2016: 294))
c. ??/* Kathy thinks she will read the newspaper quickly, but John does ~~think she will read the newspaper slowly~~.

本論は、これらのVP省略・疑似空所化とASVPEの類似点・相違点に説明を与える。

2. 省略に課される2つの条件

本節では、省略が満たすべき二つの条件を示す。一つ目の条件は、Lobeck (1990, 1995)やSaito and Murasugi (1990)以降広く支持される、(4)のような認可条件である。

- (4) ある機能主要部とその指定部が一致関係にある場合に、その補部の省略が認可される。

二つ目の条件は、(5)に示す、scopal parallelismと呼ばれるLF構造の同一性条件である。

- (5) scopal parallelism: Variables in the antecedent and the elided clause are bound from parallel positions. (Fox and Lasnik (2003: 149), Griffiths and Lipták (2014: 210))

3. VP省略と疑似空所化

本論はChomsky (1995)などに従い、動詞句はvPから成り、vPから移動した主語がTとφ素性に関して一致すると仮定する。(6)では、vPから移動したMaryとTの一致によって補部であるvPの省略が認可される。また、vPから主語が移動することで平行的な束縛関係が形成され、(5)が満たされる。

- (6) [CP C [TP John T λx [vP x talked to Bill]]], but
[CP C [TP Mary T λy [vP y talked to Bill]]] (= (1a))
└──┘ agreement

(2a)と(3a)も同様にして(4)と(5)を満たす。従って、VP省略が可能となる。

Thoms (2016)に従い、疑似空所化では、remnantはTP内部の焦点位置へ左方A'移動し、correlateもまた非頭在的に移動(QR)すると仮定する。本論では、移動した疑似空所化のremnantがFoc素性に関してTP内部のFocP主要部と一致し、それが補部の省略を認可すると仮定する。(2b)は(7)のような構造を持ち、平行的な束縛関係が形成されないため、(5)に違反し排除される。

- (7) [CP What did λx' [TP he λx [vP ... x ... x' ...]]
[TP he λy [FocP a salad λy' [vP ... y ... y' ...]]] (= (2b))

Thoms (2016)が論じるように、疑似空所化の可否はcorrelateのQRの可否に左右される。定形節境界を越えるQRは不可能であるという観察に基づく、定形節境界を越える疑似空所化の不可能性が説明される (Thoms

(2016)). (3b)は(8)のような構造を持ち、(5)に違反し排除される。

(8) [TP Kathy [T' T [FocP [Foc' Foc ... [CP [vP study German]]]]]]

[TP she [T' doesn't [FocP French [Foc' Foc λy [... [CP [vP study y]]]]]] (= (3b)) (cf. Thoms (2016: 297))

4. ASVPE

本論は、(4)と(5)を満たしさえすれば、ASVPEにおける副詞は省略位置への付加によっても省略位置からの移動によっても残置できると提案する。どちらの方略も利用できない場合に、ASVPEは不可能となる。

はじめに、付加の方略について論じる。Lobeck (1995)は、VPの省略が認可される場合、修飾要素を除いたV'もまた省略の対象になりうると論じている。本論はChomsky (2000)に従い、付加詞がvPに付加した構造もまたvPとラベル付けされると仮定し、Lobeckに基づき、主語とTの一致により上位のvPも下位のvPも省略の対象になりうると仮定する。これらの仮定に基づくと、VP副詞がvPに付加するとき、下位のvPの省略によりASVPEが可能となる。

(9) [CP C [TP John T λx [vP [vP x read the newspaper] slowly]]], and
[CP C [TP Mary T λy [vP [vP y read the newspaper] quickly]]] (= (1c))

(2c)は(10)の構造を持ち、省略範囲のvPが先行節の下位のvPと平行的であるため、(5)が満たされる。

(10) [CP How C λx' [TP John T λx [vP [vP x read the newspaper] x']]
[CP C [TP Mary T λy [vP [vP y read the newspaper] quickly]]] (= (2c))

(3c)の構造である(11)では、VP副詞はvP1に付加してremnantになる必要がある。本論は付加詞が構造に導入される際、修飾対象に付加しなければならないと仮定する。(3c)ではslowlyが埋め込み節の動詞句を修飾するが、(11)ではvP2に付加していないため、形成すべき修飾関係が形成されずASVPEは不可能となる。

(11) ... but John does [vP1 [vP1 think [CP C [she will [vP2 read the newspaper]]]] slowly]. (= (3c))
[] agreement [] *modification relation

次に、移動の方略について論じる。(12a)のように、副詞は移動することができるが、(12b)の制限も見られる。

(12) a. Quickly, he read the newspaper t.
b. ??/* Quickly, Mary said that he read the newspaper t.

(12b)の制限は、修飾要素とその修飾対象に課される(13)の条件によるものであると仮定する。

(13) The modification interpretation is formed within a single transferred domain. (Tanaka (2011: 183))

ASVPEが副詞の移動により派生される場合、疑似空所化と同様に、remnantは頭在的に、correlateは非頭在的にTP内部の焦点位置に移動すると仮定する。remnantとFocP主要部が一致して、その補部の省略を認可する。この方略を用いると、(1c)は(14)のように派生される。この場合、省略範囲である上位のvPが(5)を満たす。

(14) [CP C [TP John T λx [FocP slowly [Foc' Foc λx' [vP [vP x read the newspaper] x']]]], and
[CP C [TP Mary T λy [FocP quickly [Foc' Foc λy' [vP [vP y read the newspaper] y']]]]] (= (1c))

移動の方略により(3c)を派生する場合、VP副詞は定形節外にある主節のFocPへ移動する必要があるが、その移動により(13)が違反される。結果として、(4)による省略の認可が不可能となる。

(15) [TP John [T' T [FocP [Foc' Foc ... [vP [CP C ... [vP ... slowly ...]]]]]] (= (3c))

このように、(3c)の定形節境界を越えるASVPEはどちらの方略によっても派生され得ない。

* 本研究の内容は、Suzuki (2022)を発展させたものである。尚、本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2114の支援を受けたものである。

主要参考文献

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA. / Fox, Danny and Howard Lasnik (2003) "Successive-Cyclic Movement and Island Repair: The Difference between Sluicing and VP-Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 34, 143-154. / Lobeck, Anne (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing and Identification*, Oxford University Press, Oxford. / Suzuki, Maya (2022) "On Adverb-Stranding VP Ellipsis," *Bunka (Culture)* 85, 34-54. / Tanaka, Hiroyoshi (2011) "On Extraposition from NP Constructions: A Phase-based Account," *English Linguistics* 28, 173-205. / Thoms, Gary (2016) "Pseudogapping, Parallelism, and the Scope of Focus," *Syntax* 19, 286-307.